

みなさん、公開研お疲れ様でした。気がつけばもう11月に突入し、2学期もそろそろ終盤ですね。毎年2学期は、ひたすらゴールまで前を向いて走り続ける感じがする樋口です。

さて、11月1日（木）に低学年部で第3回特別支援研修会を行いました。サポートルーム事業の一環で、加藤先生、近田先生にお越しいただき、「読み書きが苦手な子への具体的な支援について」というテーマで研修を行いました。各クラスにも下記のような子どもたちはいませんか？

<子どもの実態>

- ・漢字が覚えられない…
- ・見本を見ながら書いても正しい漢字が書けない…
- ・枠から字がはみ出してしまう…
- ・教科書通りに読むことができない…（思い込みで読む）
- ・ことばをまとまりで見ることができない…（ぶつぶつ切れて読む）←ちくじよ逐次読みと言います。



<先生たちの困り感>

- ・どうやって力を伸ばしてあげればいいのか？
- ・なぞり書きを多くしていけば、いずれ書けるようになるのか？
- ・支援を行う用具や具体物を使わせたいが、かえって刺激になってしまう。
- ・家庭の協力が得られない、親があまり困っていない…

このような子どもたちにどのように支援を行ってあげればいいのか、この時点でどれだけ思い浮かびましたか？

「障害者差別解消法」が施行されてから「合理的配慮」という言葉に触れる機会が増えました。学校側は、保護者もしくは本人から合理的配慮の申し出があった場合、過度の負担を強いられない限りその配慮を提供する必要があります。その反対に、申し出がなくても支援を行っていかねばならない子どもたちも多くいるでしょう。その配慮を限られた人的環境の中でいかに提供できるかは、私たちの判断・工夫が求められることとなります。つまり、教師の腕の見せ所ということですね！教師一人一人が特別支援教育について学び、支援の視点を持つこと・多くの引き出しを持つことは、たくさん子どもたちを救うことに繋がると私は考えています。

今回は「読み・書きが苦手な子」について、低学年部で学んだことを参加されていない先生方にも還流し、一つの引き出しとなればよいと思います。

<読み・書きが苦手な子への対応>

読み書きができないと言っても、子どもそれぞれで抱えている困難の背景が違います。対象の子どもがどの部分が苦手得意なのか、その傾向を知ることが不可欠です。

例えば、「自分の考えはしっかり話せるんだけど、ノートに考えを書こうね、と言うとやろうとしない、または、書けない」という子どもっていますよね。その子に、「書くことが大切なの」って指導することはもちろん大事ですが、「苦手な部分はここだから…」と苦手なところに焦点を当ててアプローチをかけ過ぎていませんか。私もついそうしてしまいます。しかし、これは子どもにとって負担が大き過ぎる支援となってしまいます。だって、苦手だもんね。子どもの意欲を落としてしまう可能性も…。苦手なところは小出しでアプローチ！ぐらいがちょうどいいかもしれません。

一番よいとされる支援としては、得意なところを使って苦手さを補うこと。上記のような子どもであれば、自分の考えを書いて表現するよりも話して表現させてあげる方に重点を置くといい、ということになります。

<加藤先生のお話>

「みなさんは、読みと書きではどちらを先にするべきだと思いますか？」と、講義が始まる前に加藤先生からの質問がありました。さて、みなさんはどちらだと思いますか？低学年部の研修会でも「どちらも大事だよ」と悩んでいる先生方は多かったです。難しいですね。

加藤先生の話では、「読めない字は書けない」そうです。

1 ページ目に書いた子どもの実態で、「漢字が覚えられない」「教科書通りに読むことができない」「ことばをまとまりで見ることができない」という子どもたちには、まず文字と音を繋ぐ「読み」の指導を中心に組み立てるといいようです。また、読み飛ばしや行がずれてしまう子は、目の視る力に問題がある場合があります。以下に加藤先生が紹介された教材を載せておきます。

<読み・視るに関して使える教材>

・読みのアセスメント・指導パッケージ 多層指導モデルMIM

↑今年度サポートルーム事業で支援課から貸し出しされているので河原田小にあります！

読みを中心とした教材がたくさんあります。

・意味から覚える漢字イラストカード

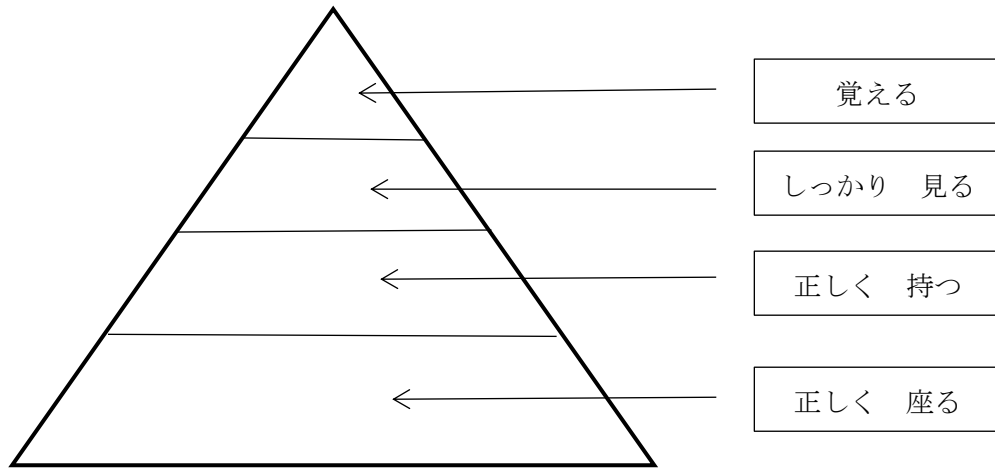
↑なかよしにあります。(全学年ではないですが…) 絵カードで分かりやすいです。

・コグトレ

↑点つなぎや模様を写すなどビジョントレーニングです。支援課から中学年・高学年向きのものが貸し出されているのでこれも河原田小にあります！

では、「書く」にはどのような指導があるのでしょうか。鉛筆で上手に書くためには、頭で考えるだけでなく、ノートや教科書をよく見て、座り続けながら、鉛筆を操作することが必要になります。

加藤先生は「書く」までに至る過程を下記のような図で説明してくれました。



「書く」ことと姿勢は大きく関係しています。姿勢がまっすぐでないで文字の形は乱れてきます。正しい姿勢で座り続けられる力は「書く」力に直結するのですね。

また、鉛筆を正しく持てることも重要です。正しくない持ち方が身につくと、疲れやすくなり、姿勢も崩れるなど悪影響が多岐にわたります。(必要以上の力で書く、または力を入れて書けない、手首のひねりができないなど) 書けないからといって書くことを中心に練習をしてもなかなか思うように伸びないのは、それ以前の段階でつまづいていることがほとんどです。もし、書くことが苦手な子どもたちがいたら、姿勢はどうか？鉛筆は正しく持てているかな？見る力はどうか？と観察してみてください。

また、「書く」の指導のところで加藤先生が紹介された書籍「体の動き指導 アラカルト 著:笹田 哲」は私が持っているので、ぜひ1度は手に取ってどんな指導の仕方があるのか見てみてください♪

低学年部では、このようなことを研修会で学びました。ほんの一部ではありますが、お伝えしたことがみなさんの引き出しの1つになっていれば幸いです。

「読み・書き」には今回伝えただけではなく、実は「聞く・話す」の分野もすごく関係していて…と話し出すと何十ページにもなってしまうので止めておきます。笑

もし、クラスの気になる子がいたら私が観察に行ったり、教材を選んだりと私がお手伝いできることはしますので、気兼ねなく相談してくださいね。

気づけば4ページも！読んでいただいてありがとうございました。使える教材が河原田小にたくさんあるので、宝の持ち腐れにせず1度は手にとる・見るところから始めてみてください♪

(文責：樋口)